

原子炉実験所だより

目次

1. 平成12年度共同利用研究(追加申請)の提出期限について	1
2. 平成12年度の一般公開について	1
3. 研究員宿泊所でのLANおよび無線LANの利用について	2
4. 原子炉実験所の平成11年度出版物について	3
5. 外国人研究者講演会報告	5
6. 外国人研究員の受入れについて	9
7. 原子炉実験所運営委員会委員名簿	10
8. 原子炉実験所各種委員会委員名簿	11
9. 職員の異動	13
10. 委員会メモ(平成12年2月～平成12年4月)	17
編集後記	18

1．平成12年度共同利用研究（追加申請）の提出期限について

平成12年度の共同利用研究は、すでに公募採択済ですが、特に希望のある場合は下半期の追加申請を受付けております。申請書類の提出期限及び送付先は次のとおりとなっておりますので、十分ご留意願います。

提出期限：臨界集合体実験装置共同利用研究

平成12年7月28日（金）

（KUR共同利用研究は下半期公募期間を終了（6月2日締切り）しており、申請できません。）

送付先：郵便番号 590 - 0494

大阪府泉南郡熊取町野田

京都大学原子炉実験所

共同利用掛

（封筒の表に「申請書在中」と朱記して下さい。）

郵送の場合は必ず「書留」か「簡易書留」にして下さい。）

問い合わせ先（共同利用掛）

T E L 0724 - 51 - 2312 F A X 0724 - 51 - 2620

E-mail kyodo@rri.kyoto-u.ac.jp

2．京都大学原子炉実験所一般公開について

平成12年度の京都大学原子炉実験所一般公開を平成12年4月8日（土）午前10時から午後4時まで実施しました。

今年は天候にめぐまれ、211名の熱意のある人々が来られました。

一般公開は前回と同様に臨界集合体棟制御室、原子炉棟炉室、同棟ホットラボ施設そして廃棄物処理棟の公開を行いました。

また、事務棟会議室において「京大原子炉実験所紹介」「母と娘の日本測り歩き」「アトムへの旅」からだの情報をとらえる「電気の歴史」「くらしと放射線」のビデオが上映されると同

時に図書棟会議室では科学実験体験コーナーが催され、稲妻球、発電機とモーター、衝突球そして霧箱などの実験を行いました。

特に、日本原子力学会関西支部の原子力オープンスクール・ワーキンググループによる「放射線の足跡をみる」の霧箱実験は、参加者が霧箱の作製から始め、自らが作製した霧箱で放射線の軌跡を見るというすばらしいもので、非常に人気を博しておりました。

さらに今回、朝日放送、毎日放送、毎日新聞からの取材も受け、終了間近には国会議員の見学もありました。

３．研究員宿泊所での LAN および無線 LAN の利用について

平成11年度に研究員宿泊所に無線 LAN が設置され、研究棟の親局と接続されました。

また、宿泊所 2 階廊下に無線 LAN 親局が設置され、宿泊所の 2 階各室で LAN が利用可能になりました。

[談話室での利用]

談話室内のハブにコンピュータのネットワークケーブル (10 B a s e - T) を接続して利用してください。談話室内では無線 LAN は利用できません。

[2 階各室での利用]

無線 LAN 子局を管理人室で借りて各室で利用してください。

(この無線 LAN 子局を談話室内では使用しないで下さい)

無線 LAN 子局を AC 電源に接続して背面の 10 B A S E - T にコンピュータのネットワークケーブル (10 B a s e T) を接続してください。詳しくは付属の説明書をご覧ください。

利用後は無線 LAN 子局を管理人室まで返却してください。

なお、新規利用に際しては接続手続きを必ず出していただくようお願いします。

登録は DHCP で接続後ホームページで登録ができるようになっています。

アップルのパソコンは事前にアドレスを取得する必要があります。

無線 LAN に関する問い合わせは下記まで

京都大学原子炉実験所学術情報メディア室

(E-mail : media@rri.kyoto-u.ac.jp TEL : 0724 - 51 - 2459)

4 . 原子炉実験所の平成11年度出版物について

○ 原子炉実験所の研究活動及び共同利用研究報告、研究会報告等の出版物

1 . 『KURRI Progress Report 1998』(目次)

. RESEARCH ACTIVITY

- 1 . Slow Neutron Physics and Neutron Scattering
- 2 . Nuclear Physics and Nuclear Chemistry
- 3 . Reactor Physics and Reactor Engineering
- 4 . Material Science and Radiation Effects
- 5 . Geochemistry and Enviromental Science
- 6 . Life Science and Medical Science
- 7 . Neutron Capture Therapy
- 8 . Neutron Radiography and Radiation Application
- 9 . Waste and TRU management
- 10 . Health Physics

. ORGANIZATION

. RESEARCH DIVISIONS AND LABORATORIES

. OPERATION AND DEVELOPMENT OF FACILITIES

. RADIATION PROTECTION AND MONITORING

. PUBLICATIONS (APRIL 1998-MARCH 1999)

. MEETINGS, SEMINARS AND VISITING SCIENTISTS

. COMMITTEE NENBERS

2 . KUR レポート (KURR-KR)

「冷中性子干渉実験の進展とその応用 ()」

干渉性研究と冷中性子スピン干渉実験 () 1999...KURRI - KR - 35
気液二相流の界面輸送現象に関する専門研究会

(日英ミニセミナー) 報告 (平成10年度) 1999...KURRI - KR - 36
平成10年度「原子力・放射線に係る社会の合意形成」

専門研究会報告書 1999...KURRI - KR - 37

低速中性子制御技術ワークショップ報告書 (平成11年度第 1 回) ... 1999...KURRI - KR - 38

中性子の物質工学への応用開発 1999...KURRI - KR - 39

「陽電子ビームの形成と物質科学への応用」

京都大学原子炉実験所専門研究会報告 1999...KURRI - KR - 40

「極端条件下における中性子回折・散乱」

第2回ワークショップ報告書	1999...KURRI - KR - 41
平成11年度「重元素の核化学」専門研究会報告書	1999...KURRI - KR - 42
粒子線の高度利用（ ）	2000...KURRI - KR - 43
「天然バリア d」専門研究会報告書.....	2000...KURRI - KR - 44
京都大学原子炉実験所「将来計画」短期研究会報告書	
平成11年度会合	2000...KURRI - KR - 45
平成11年度「放射性廃棄物管理専門研究会」報告書	2000...KURRI - KR - 46
低速中性子制御技術ワークショップ報告書（平成11年度第2回） ...	2000...KURRI - KR - 47
平成11年度「アクチニド元素の化学と工学」専門研究会報告書	2000...KURRI - KR - 48
放射線と原子核をプローブとした物性研究の新展開」	
専門研究会報告（ ）	2000...KURRI - KR - 49

3. テクニカルレポート（KURRI-TR）

フィールドバスの研究炉への設置	1999...KURRI - TR - 428
B - 2 実験孔健全性検査作業報告	1999...KURRI - TR - 429

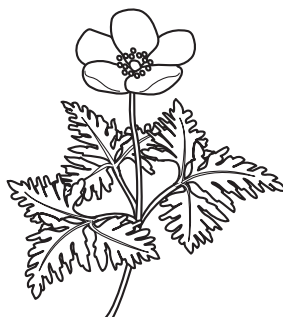
上記出版物を入手ご希望の方は、下記宛、ご請求下さい。

[請求先] 〒590-0494

大阪府泉南郡熊取町野田

京都大学原子炉実験所

出版委員会



5 . 外国人研究者講演会報告

原子炉利用研究者グループの主催により、下記のとおり講演会が行われました。

○開催日時： 平成12年2月10日（木）10：00～11：30

場 所： 研究棟プレハブ会議室

出 席 者： 10名

講 師： インド・ガルワル大学、ラケシュ ラモーラ助教授

演題および講演概要： Radon in Environment : Opportunities and Hazards

Attention to exposure of radon and its progeny and its health risk have been growing all over the world. Keeping in view the health hazard effects of radon, Department of Atomic Energy, Government of India has initiated a national radon survey by using a standard methodology. The survey was designed taking into account that its main goal is to obtain the annual average indoor radon concentration in different part of India and to find out the national radon average. In spring 1996, the collaborated research project of several institutions was started under the national radon survey project. A twin dosimeter was used for simultaneous measurements of radon and thoron inside the houses. As a part of national radon survey, about 400 houses are surveyed in Garhwal Himalaya and the results of one year integrated measurements are presented in the lecture. The indoor radon concentration was found to vary with seasonal variation, building materials and mode of the construction of house. The winter/summer ratios for different type of houses vary substantially among different places. The radon concentration was found higher in mud houses due to the typical house construction and building material used. Based on the available data, the annual effective dose and risk factors due to environmental exposure of radon and its daughter products have been calculated by using different dosimetric models. The relation between soil-gas and indoor radon and its impact on the health of people living there were also discussed in details.

○開催日時： 平成12年2月14日（月）10：00～12：00

場 所： C A棟会議室

出 席 者： 16名

講 師： ドイツ国ミュンヘン工科大学

トーマス ケラー博士

演 題 お よ び 講 演 概 要： Larmor diffraction --- a new method for high resolution diffraction using Larmor precession

本講演では、ミュンヘン工科大学でこれまで開発された高周波の rf- 中性子スピントリッパーを用いたスピネコシステムの新しい応用が紹介された。ミュンヘングループのスピネコシステムは「共鳴スピネコ」と呼ばれ、従来のスピネコ装置の強力な磁石に代わり数 MHz の周波数で駆動する rf- 中性子スピントリッパーを用いることで、装置の小型化が図られたものである。中性子スピネコ装置では、中性子のラーモア歳差運動の微小な変化によって中性子の準弾性散乱を測定するものであるが、本講演の研究では、中性子回折装置に rf- スピントリッパーを組み合わせることで、ストレス等の影響による結晶格子間隔の微小な変化をラーモア歳差運動の変化によって中性子強度を犠牲にすることなく精度よく測定することができる。

講演では、本方法の紹介と精度の評価に関する話があった。

○開催日時： 平成12年3月10日（金）11：50～12：20

場 所： 事務棟会議室

出席者： 50名

講 師： 米国ブルックヘブン国立研究所上席研究員 高橋博博士

演題及び講演概要： 米国ブルックヘブン国立研究所における加速器駆動未臨界システム研究

当実験所の「次世代の原子炉物理学に関する専門研究会」と日本原子力学会の「原子炉炉心計算手法の高度化研究専門委員会」との合同会合の開催に合わせて、平成11年度の日本学術振興会未来開拓学術研究推進事業準備研究として行われていた「トリウム燃料サイクル及び加速器駆動未臨界炉基礎研究のための予備研究」会合に出席するために訪日中の高橋博士に米国における加速器駆動未臨界システム研究の現状について講演をしていただいた。現在、加速器駆動未臨界システムはイタリアのノーベル物理学賞受賞者であるルビア博士がエネルギー・アンプリファイア（EA）として提唱するに及んで全世界的な注目を集めているが、同博士はルビア博士よりも遙かに早くブルックヘブン国立研究所（BNL）において加速器の原子力利用という観点から当該システムの研究を始め、今日に至るまで数々の論文を発表して来られた。講演の中で同博士はBNLにおけるこれまでの研究内容を幾つか紹介され、それらの研究成果に基づいて、現在、米国ロスアラモス研究所（LANL）でいわゆる加速器消滅処理用の極めて大規模な加速器駆動未臨界システムのプロジェクトが動き始めたことを紹介された。また、未臨界システムの未臨界度はあまり深くなく、実効増倍率が1に近いシステムが望ましいとの持論を披露され、当実験所で行われている研究への熱い期待を表明された。

○開催日時： 平成12年3月16日（木）11：00 - 12：30

場 所： CA棟会議室

出席者： 15名

講 師： フランス国 ラウエ・ランジュバン研究所 主任研究員
ピーター・ゲルテンボルト博士

演題及び講演概要： 「 I L Lにおける中性子による基礎物理・粒子物理研究の近況」

当講演の講師は1983年以来現在まで、高中性子束炉 H F R を中心とする欧州国際共同利用研究所・ラウエ・ランジュバン研究所 (I L L) において基礎物理・粒子物理の共同研究とその共同利用設備を担当してきた中堅研究者である。講演内容は主に二つの項目にわたって行われた。まず前半は I L L の歴史と現況並びに当面の計画について、次に後半は講師が現在 I L L においてその責任者を務める中性子による基礎物理及び粒子物理研究の近況について述べられ、最後に質疑応答が行われた。

1967年の仏独協力により発足した I L L は、翌年 H F R 建設開始、71年58MWの定格出力達成により世界で初めての中性子導管活用型ビーム専用炉として欧州の中性子研究を一挙に世界の最高峰に導き、その中性子ビーム性能は未だに世界最強水準にある。73年には英国が参画、さらにスペイン、スイス、オーストリア、ロシア、イタリアが次々に参画、多くの中性子回折装置、非弾性散乱装置、小角散乱装置、偏極中性子散乱装置、中性子反射率計、中性子干渉計、オンライン同位体分離装置、即発ガンマ線分析装置、極冷中性子及び超冷中性子実験装置等々を整備し共同研究に供するとともに、常にそれらの性能を改善し世界の最先端を歩んできた。

その研究領域はこれまで主として固体物理、物性物理、核物理、素粒子物理等の基礎科学であったが、最近、中性子による材料工学研究専用の分光器が設置される等、時代の進展とともにその応用領域も広がりつつある。 I L L - H F R 本体についても、これまでに縦型冷中性子源の設置、水平型冷中性子源の設置、原子炉容器の全面交換のための4年にわたる炉停止及び大工事等、幾度かの改造が行われてきた。現在も燃料交換のために短期間停止する以外殆ど1年中、1サイクル50日の連続運転を繰り返す高稼働率の運転利用を継続している。

目下 I L L は西暦2000年を記念した「ミレイニウム・5カ年プロジェクト」を立案しスタートさせるところである。これは、 I L L 主導の設備近代化計画のみでなく、世界各国からさらに高性能の中性子利用装置の提案と共同事業を募っており、5カ年の途中でも随時当プロジェクトに参画可能としている。

次に、 I L L の最大の特徴の一つは、縦型冷中性子源に設置された垂直式極冷中性子導管の先にタービン式の超冷中性子 (U C N) 発生装置が設けられ、極めて強力な U C N 実験を同時に複数進めることが可能であることで、そこでは U C N ボトルによる中性子崩壊寿命の精密測定や中性子電気双極能率の追求が続けられており、この両研究とも現在世界で最も精密な測定結果は I L L で得られた数値である。また、近年話題となっている U C N 異常損失現象についても重要な新しい知見が得られつつある。さらにタービンを通り抜けた極冷中性子 (V C N) を用いた精密中性子光学実験により中性子の波動性や量子力学の検証に関する新しい実験も行われている。

当講演ではこれらの最近の実験設備及び実験結果について述べられるとともに、その多くは K

U Rにおける実験研究の目的や興味と共通するところが多く、中性子散乱・中性子光学のみでなく、同位体分離や炉工学等種々の分野にわたって活発な質疑応答が行われた。また、同博士とはK U R関係者の研究上の交流が深く、講演会後も施設見学や情報交換等が行われた。

○開催日時： 平成12年4月10日（月）16：00～17：30

場 所： 図書棟会議室

出席者： 15名

講 師： ドイツ（ハーン・マイトナー研究所研究員）Thomas Krist 博士

演題及び講演概要： Neutron optical devices at Harn-Meitner Institute

ハーンマイトナー研究所では、スパッター装置を用いて先進的な様々な中性子光学素子の開発とその応用がはかられてきた。先ずスパッター装置の概要、開発製作されてきた中性子光学素子の性能等、全般的な紹介がなされた。開発された中性子光学素子の主なものとして、様々な磁気ミラーについて、磁場依存の偏極特性、反射率等の特性が詳細に議論された。また、その応用として偏極導管、偏極ベンダー等の特性が紹介された。その他、ニッケル/チタン多層膜ミラーについて述べられた。最後に、新しいスパッター装置導入に関して、その特性、期待される研究の方向性などについて言及された。

なお、Thomas Krist 博士は、多層膜スピンスプリッターの開発あるいはニッケル/チタン多層膜ミラーを用いた中性子ベンダーの開発等のテーマで、京大原子炉実験所と共同研究を行ってきた研究者である。当実験所でも、近々、高性能スパッター装置の導入による中性子光学素子の開発が行われることになっているが、共同研究の今後の一層の発展が期待される。

○開催日時： 平成12年4月19日（水）16：00～17：30

場 所： 図書棟会議室

出席者： 16名

講 師： アメリカ合衆国 アルゴンヌ国立研究所
パルス中性子研究部門 中性子散乱グループリーダー
Chun Loong 博士

演題および講演概要： The Crystal Phases, Microstructure, and Atomic Dynamics of Industry-Relevant Nanostructured Metal Oxides

Rare-earth (RE) modified high-surface-area zirconia and alumina powders are important support materials in three-way catalysts (TWCs) for automotive emission control. The development of durable, high-activity, and versatile TWCs has become a pressing issue in governmental and industrial research due to the strict regulatory policies imposed on automotive emission standards.

The crystal phases, particle size and porosity, thermal stability, and surface chemistry are important design factors for the realization of advanced catalytic applications. We have characterized the crystal phases and microstructure of nanostructured RE-ZrO₂ and RE-Al₂O₃ powders by the method of neutron scattering. The redox behavior of Ce ions and metal-support interactions in CeO₂-ZrO₂/Pt catalysts were investigated by in-situ x-ray and neutron diffraction. The results provide a microscopic interpretation of the nature of the nanoparticles, defect structure, and catalytic functions.

6 . 外国人研究員の受入れについて

氏 名	研 修 題 目	受 入 期 間	受 入 教 官
楊 大 為 (中華人民共和国 神戸大学 外国人研究員)	放射線照射、又は紫外 線照射によって誘導さ れる皮膚のタンパク質 中の翻訳後修飾	平成12年 4 月 1 日 ~ 平成13年 3 月31日	放射線生命科学 研究部門 助教授 藤井 紀子



7．原子炉実験所運営委員会委員名簿

平成12年4月1日現在
(順序不同)

東 北 大 学	大学院工学研究科	教 授	石 井 慶 造
同	同	同	中 村 尚 司
高エネルギー加速器研究機構	放射線科学センター	センター長	柴 田 徳 思
大 阪 大 学	大学院理学研究科	教 授	南 園 忠 則
同	大学院工学研究科	同	竹 田 敏 一
同	大学院医学系研究科 バイオメディカル教育研究センター	同	井 上 俊 彦
九 州 大 学	大学院工学研究科	同	的 場 優
同	応用力学研究所	同	蔵 元 英 一
広島国際大学	保健医療学部	同	竹 味 弘 勝
京 都 大 学	大学院医学研究科	同	小 西 淳 二
同	大学院工学研究科	同	今 西 信 嗣
同	大学院農学研究科	同	藤 田 稔
同	原子炉実験所	同	藤 田 薫 顕
同	同	同	小 野 公 二
同	同	同	内 海 博 司
同	同	同	義 家 敏 正
同	同	同	川 瀬 洋 一
同	同	同	森 山 裕 丈
同	同	同	神 田 啓 治
同	同	同	松 山 奉 史
同	同	同	長 谷 博 友
同	同	同	代 谷 誠 治
同	同	同	柴 田 誠 一
同	同	同	福 永 俊 晴
同		事務局長	大 澤 幸 夫

8. 原子炉実験所各種委員会委員名簿

研究計画委員会

平成12年4月1日現在

(順序不同)

委員長	京都大学	原子炉実験所	教授	福永俊晴
委員	高エネルギー加速器研究機構	放射線科学センター	センター長	柴田徳思
	大阪大学	大学院工学研究科	教授	竹田敏一
	九州大学	応用力学研究所	同	蔵元英一
	京都大学	大学院工学研究科	同	今西信嗣
	同	原子炉実験所	同	義家敏正
	同	同	同	森山裕丈
	同	同	助教授	小林捷平
	同	同	同	大久保嘉高
	同	同	同	藤井紀子

共同利用研究委員会

平成12年4月1日現在

(順序不同)

委員長	京都大学	原子炉実験所	教授	長谷博友
委員	東北大学	金属材料研究所附属材料試験炉利用施設	助教授	三頭聡明
	東京大学	大学院農学生命科学研究科	同	中西友子
	京都教育大学	教育学部	教授	生島隆治
	大阪大学	大学院工学研究科	同	山中伸介
	九州大学	同	同	的場優
	同	大学院理学研究科	助教授	町田光男
	姫路工業大学	理学部	教授	小原孝夫
	若狭湾エネルギー研究センター	研究部	部長	大谷暢夫
	広島国際大学	保健医療学部	教授	竹味弘勝
	東京大学	大学院工学系研究科附属原子力工学研究施設	同	上坂充
	日本原子力研究所	先端基礎研究センター	研究主幹	新村信雄
	京都大学	大学院工学研究科附属量子理工学研究実験センター	助教授	神野郁夫
	同	原子炉実験所	教授	内海博司
	同	同	同	齊藤眞弘
	同	同	同	工藤章
	同	同	同	三島嘉一郎
	同	同	助教授	川野眞治
	同	同	同	増永慎一郎
	同	同	同	瀬戸誠

臨界集合体実験装置共同利用研究委員会

平成12年4月1日現在

(順序不同)

委員長	京 都 大 学	原 子 炉 実 験 所	教 授	代 谷 誠 治
委 員	東 北 大 学	大学院工学研究科	助 手	岩 崎 智 彦
	大 阪 大 学	同	教 授	竹 田 敏 一
	九 州 大 学	同	同	石 橋 健 二
	武 蔵 工 業 大 学	原 子 力 研 究 所	同	金 子 義 彦
	日本原子力研究所東海研究所	エネルギーシステム研究部	副主任研究員	須 崎 武 則
	京 都 大 学	原 子 炉 実 験 所	教 授	藤 田 薫 顕
	同	同	同	義 家 敏 正
	同	同	助 教 授	三 澤 毅

原 子 炉 医 療 委 員 会

平成12年4月1日現在

(順序不同)

委員長	京 都 大 学	原 子 炉 実 験 所	教 授	小 野 公 二
委 員	同	大学院医学研究科	同	小 西 淳 二
	同	原 子 炉 実 験 所	同	内 海 博 司
	茨城県立医療大学	放射線技術科学科	同	稲 田 哲 雄
	国立舞鶴病院		院 長	上 田 聖
	京 都 大 学	大学院医学研究科	教 授	平 岡 眞 寛
	同	同	同	宮 地 良 樹
	大 阪 大 学	大学院医学研究科 バイオメディカル教育研究センター	同	井 上 俊 彦
	同	大学院医学系研究科	講 師	平 吹 度 夫
	京 都 大 学	原 子 炉 実 験 所	教 授	齊 藤 眞 弘
	同	同	助 教 授	小 林 捷 平

9 . 職員の異動

1 . 退 職

平成12年 2 月29日付け

核エネルギー基礎研究部門 (任期满了)	リサーチ・アシスタント	びょん 下	ちよる 哲	ほ 浩
核エネルギー基礎研究部門 (任期满了)	リサーチ・アシスタント	きた 北	むら 村	やす のり 康 則
核エネルギー基礎研究部門 (任期满了)	リサーチ・アシスタント	やなぎ 柳	た 田	せい や 誠 也
応用原子核科学研究部門 (任期满了)	リサーチ・アシスタント	はる 春	き 木	り え 理 恵
放射線生命科学研究部門 (任期满了)	リサーチ・アシスタント	た 田	なか 中	けん いち 憲 一

平成12年 3 月31日付け

放射線生命科学研究部門 (停年退職)	教 授	あか 赤	ぼし 星	みつ ひこ 光 彦
原子炉応用センター (停年退職)	助 教 授	まつ 松	ばら 原	たかし 丘
原子炉応用センター (退 職)	助 教 授	はやし 林	まさ 正	とし 俊
原子炉安全管理研究部門 (停年退職)	講 師	みず 水	ま 間	みつ お 満 郎
中性子科学研究部門 (停年退職)	助 手	み 見	たに 谷	しげ 史 薫
事務部長 (定年退職)	事 務 官	いし 石	だ 田	かづ き 和 樹
技術室放射能安全管理班長 (定年退職)	技 官	きた 北	がわ 川	いさお 功
技術室実験設備管理掛長 (定年退職)	技 官	こ や の 小谷野	のぶ 信	みつ 光
核エネルギー基礎研究部門 (名古屋大学大気水圏科学研究所附属共同研究観測プロジェクトセンター助教授) (任期满了)	客 員 助 教 授	ます 増	ざわ 澤	とし ゆき 敏 行

核エネルギー基礎研究部門 (原子燃料工業株式会社ソフトエンジニアリング室技師) (任期満了)	客 員 助 教 授	やま もと あき お 山 本 章 夫
保健物理管理室 (任期満了)	事 務 補 佐 員	しお たに ち ず こ 塩 谷 智 津 子
経理課機械掛 任期満了)	技 能 補 佐 員	やま した しゅう じ 山 下 周 司
経理課機械掛 (任期満了)	技 能 補 佐 員	ね ごろ とし はる 根 来 年 治
原子炉安全管理研究部門 (任期満了)	非 常 勤 研 究 員	たか みや こう いち 高 宮 幸 一
バックエンド工学研究部門 (任期満了)	非 常 勤 研 究 員	しえん じゃ うえい 盛 嘉 偉
核エネルギー基礎研究部門 (任期満了)	研究支援推進員	ちよう みよん すん 曹 明 順
バックエンド工学研究部門 (任期満了)	研究支援推進員	にし かわ き た ろう 西 川 佐 太 郎
放射線生命科学研究部門 (任期満了)	研究支援推進員	ふじ もと よう こ 藤 本 洋 子
放射線生命科学研究部門 (任期満了)	研究支援推進員	おお やま かおる 大 山 かおる
原子炉医療基礎研究施設 (任期満了)	研究支援推進員	お の しょう こ 小 野 昌 子
平成12年 4 月30日付け 核エネルギー基礎研究部門 (辞 職)	研究支援推進員	きた むら よし こ 北 村 好 子

2 . 採 用

平成12年 2 月16日付け バックエンド工学研究部門	事 務 補 佐 員	なか の けい こ 中 野 敬 子
平成12年 3 月13日付け 原子炉安全管理研究部門	事 務 補 佐 員	にし たに じつ み 西 谷 日 見
平成12年 4 月 1 日付け 原子炉安全管理研究部門 技術室	助 手 技 官	たか みや こう いち 高 宮 幸 一 みや ち ま ゆみ 宮 地 真 弓

核エネルギー基礎研究部門 (理化学研究所安全管理室調査役)	客員助教授	上 ^{うわ} 蓑 ^{みの} 義 ^{よし} 朋 ^{とも}
核エネルギー基礎研究部門 (原子燃料工業株式会社ソフトウェアエンジニアリング室技師)	客員助教授	山 ^{やま} 本 ^{もと} 章 ^{あき} 夫 ^お
放射線生命科学研究部門	技術補佐員	藤 ^{ふじ} 本 ^{もと} 洋 ^{よう} 子 ^こ
原子炉医療基礎研究施設	技術補佐員	小 ^お 野 ^の 昌 ^{しょう} 子 ^こ
原子炉安全管理研究部門	非常勤研究員	李 ^り 三 ^{さん} 烈 ^{りつ}
中性子科学研究部門	非常勤研究員	戸 ^と 田 ^だ 充 ^{みつ}
核エネルギー基礎研究部門	非常勤研究員	北 ^{きた} 村 ^{むら} 康 ^{やす} 則 ^{のり}
核エネルギー基礎研究部門	非常勤研究員	柳 ^{やなぎ} 田 ^だ 誠 ^{せい} 也 ^や
中性子科学研究部門	研究支援推進員	小 ^こ 谷 ^や 野 ^の 信 ^{のぶ} 光 ^{みつ}
放射線生命科学研究部門	外国人研究員	楊 ^{やん} 大 ^だ 為 ^{うゑい}
平成12年4月10日付け 放射線生命科学研究部門	研究支援推進員	江 ^え 藤 ^{とう} 浩 ^{ひろ} 子 ^こ
平成12年4月27日付け 放射線生命科学研究部門	非常勤研究員	あるーな ^{あるーな} くまり ^{くまり} Aruna Kumari

3.昇任

平成12年4月1日付け 事務部長 (島根大学庶務課長より)	事務官	永 ^{なが} 野 ^の 節 ^{たかし}
総務課庶務掛長 (工学部等総務課庶務掛主任より)	事務官	山 ^{やま} 本 ^{もと} 淳 ^{じゅん} 司 ^し
技術室原子炉管理班長 (同室研究炉管理計画掛長より)	技官	辻 ^{つじ} 本 ^{もと} 日東 ^{ひとみ} 實 ^み
技術室放射能安全管理班長 (同室放射線管理掛長より)	技官	佐 ^さ 野 ^の 治 ^{はる} 彦 ^{ひこ}
技術室研究炉管理計画掛長 (同室研究炉管理計画掛主任より)	技官	小 ^こ 塚 ^{づか} 敏 ^{とし} 彦 ^{ひこ}
技術室実験設備管理掛長 (同室実験設備管理掛主任より)	技官	松 ^{まつ} 下 ^{した} 録 ^{ろく} 治 ^じ
技術室放射線管理掛長 (同室実験設備管理掛主任より)	技官	林 ^{はやし} 禎 ^{よし} 彦 ^{ひこ}

4. 配置換

平成12年4月1日付け

原子炉安全管理研究部門 （原子炉応用センター教授より）	教	授	にし 西	まき 牧	けん 研	ぞう 壯	
総務課庶務掛長 （研究協力部研究協力課専門職員へ）	事	務	官	なが 長	た 田	とし 敏	ゆき 之
総務課図書掛長 （経済研究所図書掛長へ）	事	務	官	かな 金	もり 森	たか 孝	ゆき 之
総務課庶務掛員 （学生部厚生課保健掛へ）	事	務	官	まつ 松	だ 田	しゅう 周	いち 一
総務課庶務掛員 （医学部附属病院医事課南西医療事務掛より）	事	務	官	おき 沖	た 田	まさ 真	き 樹
経理課用度掛主任 （工学部等経理課用度掛主任へ）	事	務	官	ふじ 藤	え 江	ひで 英	お 雄
経理課用度掛主任 （ウィルス研究所会計掛主任へ）	事	務	官	ふか 深	お 尾	ひで 秀	まさ 正
経理課用度掛員 （経理部経理課収入掛より）	事	務	官	いわ 岩	せ 瀬	とも 智	ひろ 博
経理課用度掛員 （医学部附属病院管理課給与掛より）	事	務	官	まつ 松	した 下		さとし 聡
経理課工営掛主任 （工学部等経理課施設掛主任より）	技		官	おお 大	たに 谷	のり 典	お 生
経理課電気掛主任 （舞鶴工業高等専門学校会計課施設係電気主任へ）	技		官	あら 荒	が 賀	じゅん 順	いち 一
経理課電気掛主任 （舞鶴工業高等専門学校会計課施設係電気主任より）	技		官	ひがし 東	やま 山	ゆき 幸	ひろ 弘

5. 転 入

平成12年4月1日付け

総務課図書掛長 (大阪教育大学附属図書館雑誌係長より)	事	務	官	さわ 澤	や 谷		ただし 正
--------------------------------	---	---	---	---------	--------	--	----------

6. 併 任

平成12年4月1日付け

原子炉応用センター長(新任)	教	授	内	海	博	司
原子炉医療基礎研究施設長(再任)	教	授	小	野	公	二

10. 委 員 会 ム 毛

(平成12年2月～平成12年4月)

平成12年

- 2月 4日 臨時協議員会
- 2月18日 臨界集合体実験装置共同利用研究委員会
- 2月21日 原子炉安全委員会
- 2月25日 協議員会
- 3月13日 研究計画委員会
- 3月17日 協議員会
- 3月21日 地域広報活動委員会
- 3月24日 原子炉安全委員会・保健物理委員会合同会議
- 4月21日 研究計画委員会
- 4月21日 運営委員会
- 4月21日 協議員会
- 4月28日 原子炉安全委員会



編集後記

今年は所長選挙の年にあたる。省庁統合を前に今年で最後となる学術審議会の原子力部会では将来を含めた当実験所のあり方が俎上に上っている。平成5年度の学術審議会報告に基づいて、KURの安全性を確保しつつ、5つの特徴的研究領域に関する研究を行うため、平成7年に研究組織の改組を行ってから5年を経過した今年、実験所の外部評価が行われることになっている。

これら諸々の課題を肅々とこなし、是非とも実験所、ひいては大学における原子力研究教育の将来に繋がる総括の年にしたいものである。某在阪球団が何連勝した、何連敗した、やれAクラスだ、Bクラスだのと一喜一憂している場合ではない。実験所は危急存亡の時期を未だに脱してはいない。そればかりか、新しく大学の独立行政法人化に向けた動きも着実に進められている。21世紀の大学における原子力研究教育は如何にあるべきか？ この中で実験所はどのような役割が果たせるのか？ 実験所は必要か、不要か？ 文部省の担当官からは、実験所に対して「原研と一緒にになったらどうか？」、「京大エネルギー理工学研究所等と併合したらどうか？」などとも言われている。実験所は単に京大の附置研究所というばかりではなく、全国大学の共同利用研究所である。実験所の将来は大学の原子力研究教育の将来を左右することになる。

昨年のJCO臨界事故を引き合いに出すまでもなく、たとえ世の中が原子力開発を縮小する方向に進んだとしても原子力の利用が続く限り、原子力の高等教育は必要不可欠であり、利用を支える、あるいは原子力利用の終焉を後顧の憂いなく迎える、ためにも基礎的、萌芽的な原子力研究が必要不可欠である。原子力の安全文化を確立するためには、本来、個々の研究者の自由意志と創造性に委ねられ、批判が許される学問の府、大学における原子力研究の場が是非とも必要と考えられる。もちろん、原子力開発を維持、発展させようとするなら、なおさらのことである。

一方、最近、毎年複数の所員が停年あるいは定年を迎え、実験所を後にする状況が出現しており、これに代わって新しい所員が採用されている。もうすぐ所員の半数が入れ替わる時期を迎えることになる。これは、考えようによっては、新たな門出に向けた準備が着々と整いつつあると見ることもできる。実験所では、過去の有形無形の貴重な財産を継承しながら新所員を迎える努力をしており、新しい芽が育ちつつあるものと期待したい。

現在、世の中では効率化、合理化が叫ばれ、経費削減が進められている。一方、国の原子力関係予算は莫大であるが、現在の仕組みでは大学に回ってこない。厳しい時期ではあるが、たとえ少しでも大学に原子力関係予算が流れてくれば、かなり大きな研究計画でも可能となるのだが…。実験所の将来計画が世の認知を受けることに期待したい。

原子炉実験所だより№48

発 行：京都大学原子炉実験所

〒590-0494 大阪府泉南郡熊取町野田

☎ 0724 - 51 - 2312 (直)

FAX 0724 - 51 - 2620

メールアドレス：kyodo@post1.rri.kyoto-u.ac.jp

ホームページ //www.rri.kyoto-u.ac.jp//

編 集：「原子炉実験所だより」委員会

発行日：平成12年 6 月 1 日

印刷所：株式会社 泉文社

〒596-0821 岸和田市小松里町359 - 3

☎ 0724 - 44 - 9761

FAX 0724 - 45 - 8900

メールアドレス：senbun@sensyu.ne.jp